



## 体験や関わりを通して学ぶ大切な機会に・・・

11月も後半となりました。今年に入ってから、「当たり前」のように実施してきた学校行事が、これまでの形式や内容では実施できないことがいくつもありました。それぞれの行事については実施の有無から始まり、実施の際の感染症対策など、例年よりも時間をかけた検討や準備が必要となっています。その時代の分野において当たり前のこととして考えられていた認識や思想、社会全体の価値観などが革命的・劇的に変化することを「パラダイムシフト」と言うようですが、コロナ禍によってシフトせざるを得ない教育活動はまだまだありそうです。

このような中、11/5(木)・6(金)には6年生の修学旅行を、11/10(火)には5年生の自然教室を実施しました。大幅な計画変更を余儀なくされましたが、子どもたちは主体的に生き生きと活動に取り組み、改めて子どもたちの行動力と感性に驚かされるばかりでした。同時に、行事は子どもたちの心に潤いを与えるものであることを再認識しました。11/25(水)には、縦割りで校外活動(「西津の宝さがしめぐり」)を実施します。行った先のいろいろな場所で、新しいこととの出会いから自分自身の関心の幅を広げることができます。実際に触れ合うことによる驚き、気づきや関心が自ら学ぼうとする力を引き出すことにつながります。また、集団で行動するときの約束や公共の場でのルールやマナーについて、体験を通して学ぶことも重要だと考えています。感染症対策を講じながら、各学年に応じたポイントを明確に示し、一人一人の力が高まるように取り組んでまいります。

東  
尋  
坊  
に  
て



## 学校公開日についての再度のお知らせです

すでに、10/9付の文書でお知らせいたしましたように、明日から3日間にわたって今年度初めての授業公開を実施いたします。子どもたちの学びの様子をご覧ください。

なお、参観時間の密状態を避けるため、3日間の内、1回のみ参観とさせていただきますので、どうかご了承ください。



## 良い人間関係をつくるには！



今年度のスクールプランの重点目標の一つに「互いの良さや努力を認め合い、思いやり、つながる児童の育成」を掲げています。ふだんの授業はもとより、さまざまな体験活動や学校行事の中で、人に優しく、自分も友達も大切にすることで自己有用感を高めてほしいと願っています。そして、これが実践できたかどうかを測る評価項目として「友達との人間関係が良く、学校が楽しいと思える児童90%以上をめざす。」としています。子どもたちが「学校が楽しい」と思える必要条件としての「友達との良好な人間関係づくり」を大事にしています。

ところで、11/12(木)の福井新聞のコラム「越山若水」に以下のような文章が掲載されていました。

日本人にとって、自分の誤りを認めず自己正当化に固執する人物は「みっともない」と低く見られる。一方、相手の心情を思いやり、謝罪できる人物は「できた人間」と高く評価される。典型的なケースがある。2000年シドニー五輪の柔道男子100kg超級決勝戦。日本の篠原信一選手は「世紀の誤審」で金メダルを逃した。しかし篠原選手は「弱いから負けたんです。それだけです。」と潔いひと言。審判のことには触れず、一切弁明もしなかった。欧米社会は「自己中心の文化」で理屈の正しさや自分の正義を重視する。非を認めれば責任問題に直結するため「私は悪くない」の一点張りになる。日本では「間柄の文化」を優先し、人間関係を良好に保つことを意識する。だから言い訳しないのが美風とされる。西洋人と日本人の感受性の違いを比較したのは心理学者、榎本博明さんである。(『みっともない』と日本人」日本経済新聞出版) 以下省略・・・



子どもたちにとっては、友達との人間関係を良好に保つことで自分の確かな居場所ができ、安心していろいろなことにチャレンジする中で人間力を高めていくことができると考えています。そこで、良い人間関係をつくるための努力目標としてよく耳にするのが、「周りに応援されるような人」になることです。応援される人は周りの人の心を動かし、感動を与え、良好な人間関係を築くことができるというものです。「自分のためだけではなく、誰かのために一生懸命になっている」「文句を言ったり言い訳をしたりしない」「ポジティブに挑戦し、真剣に取り組んでいる」人などは応援されやすい人だと言われています。そして、「人に優しく、自分も人も大切にできる人」も応援したくなります。大人である私たちもふり返りたい内容です。